70周年を迎えて

須和田農園・園主　江尻宗一

当園の創業は1945年（昭和20年）9月26日になります。祖父・江尻宗三郎と陸軍予備士官学校より帰って来た父・江尻光一とによって、終戦から間もない時に園芸農家としての営業が始まりました。実はこの前の10年ほどは須和田農園の開園者である祖父宗三郎が、現在の地で趣味としての洋らんをはじめ、様々な草花や野菜などを栽培し楽しんでいました。もちろん戦時中は食べるための食料を栽培していたに違いありません。当初は小さな温室で栽培していた洋らんが、終戦後進駐軍による思わぬカトレアの切り花需要で売れるようになり、何とか農園の経営が成り立っていたようです。

その後デパートでの洋らん展が始まり、日本の経済成長とともに段々と洋らんの人気が出始めました。1970年代中頃からはシンビジュームの大量生産が始まり急激に一般の家庭にまで洋らんが普及し始めました。当園でも1970年代初めよりカトレアとパフィオの交配育種をはじめ、現在ではその交配番号は3700番台にまで進んでいます。当園の70年間のうちすでにその半分以上の40年ほどの時間をかけて様々な品種を作り出してきました。

当園の初期の交配で、今では世界中の洋らん展で見かけるようになったC.Tropical Pointer（トロピカルポインター）は1971年に交配をした記録が残っています。この品種はたまたま隣同士にあった花を交配して生まれたとのことで、40年以上の時が経っても世界中のあちらこちらで楽しんでいただいていることは誠にうれしい限りです。このときは、現在使っている交配番号システムになる前でK111という記録が残っています。最近でもたまにカタログに登場するRlc.Satomi（里見）やC.Little Oliver（リトルオリバー）、Rlc.Pastel Queen（パステルクイーン）も1970年代の交配から生まれ、現在に至る花たちです。

初期の交配親はほとんどが輸入株で、カリフォルニアやハワイから当時の有名な蘭園より導入した株でした。それも高価な優れた個体を輸入できなかった時代ですから、安価な実生苗を購入し、まずはその中から優れた花を選別、そしてその花を交配親に使うといった方法で始まっています。この賭けのような方法で始まった交配育種ですが、ラッキーであったのは運良くいくつかの優秀花に出会えたことでしょう。今も続くラベンダー系の重要な交配親となったC.Commander（コマンダー）もカリフォルニアから輸入した実生苗からの選抜品でした。

当初は交配の進んでいるアメリカの品種を頼りにしていた当園の育種も、1980年代後半頃からは自園で選抜した花を交配親に使えるようになってきます。ちょうどその頃日本の洋らん界では、その後の20年ほどが大きく変わるビッグイベントが開催されました。

1987年に第12回世界蘭会議・展示会が東京と神奈川で開催され、なんと展示会には予想を大幅に上回る40万人もの方々が蘭を見に来て下さいました。会場は小田急・向ヶ丘遊園に作られた特設のエアドーム会場で、あまりの人出の多さに始発駅である新宿駅で小田急線ホームへの入場制限が行われたほどでした。当園も出店をしていましたが、あまりのお客様の多さに販売品はなくなり、レジは壊れて使えなくなるといった洋らん界始まって以来の事となったわけです。私は当時アメリカでの研修から戻りちょうど半年が経とうとしていた頃で、事務局の手伝いにかり

開園者の江尻宗三郎（右）と妻・市江（左）

前園主　故・江尻光一

C.Tropical Pointer　'Cheetah'
トロピカルポインター 'チータ'

C.Commander　'Pink Pal'
コマンダー 'ピンクパル'

第12回世界蘭会議でのディスプレーとトロフィー

出され、何が何だかよくわからないままにこのイベントが終わったことを覚えています。また、その1987年、世界蘭会議の開催直前に当園で交配した花でRlc.Twenty First Century（トゥエンティーファーストセンチュリー）があります。この花が今ではラベンダーの極大輪花として世界的に有名になりつつあります。

このイベントを境に日本の洋らん界は一気に国際化が進んでいきます。質の高い日本の花を見た諸外国の方々が、日本で交配育種された花に注目をし始めたのです。

世界蘭会議の後に開催が始まり、現在まで続いている世界らん展日本大賞（東京ドーム）には、洋らんブームで多くのお客様が来場され、海外からも有名蘭園が数多く出店をし、優れた花が日本にどんどんと集まるようにもなってきました。

当園は第12回世界蘭会議の後、細々とですがアメリカ、ヨーロッパ、東南アジア、南米の洋らん展へ出展し、当園で交配育種した花を出品すると、その中のいくつかには思わぬ良い賞をいただいたりしてきました。海外の展示会で自分たちの作出した花が評価されることは、やはりうれしいものです。前園主の故・江尻光一は、晩年その優れた交配育種を評価するトロフィーをアメリカ蘭協会から受賞しています。

アメリカ蘭協会よりの
トロフィー（2011年）

国内の洋らん展においては、JOGA主催の新春洋らん展で14回の農林水産大臣賞を受賞しています。これは国産新花（国内で交配育種された品種）に与えられる賞で、新品種の開発を行うものにとっては大変重要な賞となっています。またこの洋らん展では高円宮妃牌という優れた原種一代交配種に与えられる賞も有り、2回受賞をしています。

また東京ドームでの世界らん展では、3回の日本大賞をはじめ多くの賞を受賞してきました。

交配育種は大変気の長い仕事で、カトレアですと新品種を作り出すまでに約10年、その後販売用の株を作るまでに5年ほどの時間がかかります。一度休んでしまうとその期間を取り返す事ができない気の長い継続性のある作業です。現在では少しペースを落としながらもカトレア系の交配育種は続けています。洋らんの時計で見ると70年という時間は決して長い時間ではありません。今年交配をした実生から、10年、15年後に皆さんをビックリさせる花が咲くことを願いながら交配をしています。

人の時計では大変長い70年という時間を支えて下さいました皆様へ感謝を申し上げ、今後もご支援を賜りますようお願い致します。

農林水産大臣賞受賞花・
トゥエンティーファーストセンチュリー‘ニュージェネレーション’（右）と
その交配親のメモリアイチエエジリ‘ブリリアント’（左）
Rlc.Twenty First Century ‘New Generation’（Right）&
Its parent Rlc.Memoria Ichie Ejiri ‘Brilliant’（Left）

RHS 200周年記念トロフィーと
受賞作品・セロジネ　クリスタータ、ホロレウカ‘ピュアホワイト’
当時のRHS蘭委員会委員長・ヘンリー・オークレー氏との記念撮影（2004年）

高円宮妃牌と受賞作品・グットデイズ‘ナインティース’（2008年）

日本大賞受賞作品前での記念撮影　江尻光一と妻・久子（2011年）